

大乘

DAIJO 法話

そのままありのまま



千葉・天真寺衆徒
にしはら たつや
西原 龍哉

縁あって、七年前から近所の特別養護老人ホームに傾聴ボランティアに行っております。それに先立って講義を受け、話し相手との関わり方について学びました。大切なのは「相手の話を否定せず、そのままありのままに聞く」とことと教わり、それなら私でもできそうかなと思って現場に出ましたが、その難しさを実感することが多々起こります。

施設へは月に一回、昼間に皆さんでお茶を飲んだり、おしゃべりを楽しむためのサロンに伺

らないかな、どうやって切り上げよう」などと思いつつ聞いています。相手の話をそのままありのまま聞いていることにはなりません。相手にきちんと向き合っていなかったと、後で反省したことです。

これは、一緒にボランティアをしている友人の経験談で、施設のデイサービスに伺った時の話です。ある時、八十代のご婦人とお話をしていると、その方が「早くお迎えが来ないかなあ」とつぶやかれたそうです。友人はその言葉をそのまま受け取り、時計を見ながら「大丈夫です。三時に迎えが来ますよ」と施設の送迎バスの時間を告げたそうです。すると、そのご婦人はそれから口をきいてくれなくなったといひます。その話を聞いて、ちょっと間の抜けた友人の反

います。毎回十人ぐらいの方が集まっております。しゃいですが、その中に、毎月いらして毎回同じ話をされる方がいます。「その話は聞きまし

たよ」とのどまで言葉が出かかりますが、それでは相手を傷つけてしまいます。「そうですか、そうですか」と初めてのよう聞かせていたのですが、これも回数が増えなるとなかなかな簡単ではありません。まわりを見渡して「あの方は初めて見るお顔だから、お話を聞いてあげたい」と思うと、目の前の方の話には「早く終わ

ら聞かないと、本当の意味での「聞く」ということにはならないものだ」と、その難しさを改めて思い知らされました。

自分はわかっている、自分は正しいという我が執しゅうの目を通して見る世界は、すべてが自分中心の世界です。築地本願寺の掲示板に「人間みんな裁判官 他人は有罪 自分は無罪」という言葉がありました。私たちがそれぞれ持っている閻魔帳えんまちょうには、あの人はいつも不注意だから有罪、自分の間違いには疲れていたから仕方がなかつ

たなどと理由をつけて無罪と、自分に都合がよいことばかりが書かれているのではないでしょうか。

以前、ご門徒さんのお宅で、その方のお連れ合いの法要をつとめました。施主であるご主人は、その地に移り住み、自ら会社を立ち上げ事業を拡大してこられた方です。私がお仏壇の前でおつとめと法話を終えたところで、ご主人がご家族に向かってこんなお話を始められました。「私はこれまで仕事一本でやってきた。これは自分だけの力だと思っていたが、実は妻の支えのおかげであった。妻への感謝の思いを家族の者にも伝えたかったので、今日の法事をつとめた」

そして私の帰り際、「妻とは長く連れ添って

きたから、妻のことは何でもわかっているつもりでしたが、身近にいても見えないことがあるのですね。仏さまのお話を聞かせていただいて、最近やっとそのことに気づくことができました」とおっしゃいました。私たちは身近な人であるほど、その人を自分の思い込みで見え、判断してしまいがちです。しかし、それでは、その人と心から分かち合うことも、本当の価値に気づくこともできないのです。

ご門主が示された「私たちのちかい」の三番目には、「自分だけを大事にすることなく 人と喜びや悲しみを分かち合います 慈悲に満ちみちた仏さまのように」とあります。阿弥陀如来は、相手の喜びも悲しみもわが事とし、一緒に喜び悲しんでくださいます。まさに慈悲のお



カット 長井多美栄

心です。それに対して、私の本性はというと、仏さまのお心とは正反対です。人の喜びにはそねみやねたみの心を起こし、人の悲しみには心から寄り添うことができません。しかし、そんな私が、仏さまのお話を聞かせていただき、そのお育てに遇^あってはじめて、自分中心の自らの生き方を知らされ、人と喜びや悲しみを分かち合えるような仏さまの視点へと変えられていくのです。阿弥陀如来の慈悲に満ちたお心の中に生かされる安心感が、人と分かち合うしあわせや喜びを教えてくださいました。相手の話をそのままありのまま聞き、相手の喜び悲しみを分かち合う。そんな仏さまの視点を大切に、これから傾聴ボランティアとして精進を続けていきたいです。